

森林に暮らす哺乳類の子作りと子育て(4)

ウサギ

研究調整監 山田文雄

ウサギ類は、猛禽類や食肉類に、いつもねらわれながら生活しています。このためその繁殖行動にも、食べられないための工夫があります。

ウサギの仲間の交尾方法は、基本的に乱婚性で、交尾時間は1～2分と極めて短時間です。捕食の危険を回避するためと思われます。また、メスは交尾刺激によって交尾の10～15時間後に排卵を起こし確実に妊娠に至る仕組みです(交尾排卵または誘導排卵)。また出産後直ちに交尾妊娠でき(後分娩発情)さらに胎児を持ちながら新たに妊娠できます(重複妊娠)。捕食の危険性が高い環境で確実に子孫を残し、好条件時には個体数を短期間に効率的に増やす方法を備えているといえます。

ウサギの仲間は、誕生時における子の発育状態の違いにより、アナウサギ類(rabbits)とノウサギ類(hares)の二グループに分けられます。アナウサギ類の子は、体毛が生えそろうず、目が閉じ、自力では移動できない状態で誕生します(晩成性)。体温調節能力が未発達のため、土中などの巣穴内で育ちます。一方、ノウサギ類の子は、誕生直後から体毛が生えそろう、目が開き、自力で逃げ回ることが可能です(早成性)。体温調整能力も備えていますので、地表に産み落とされても生きていけます。

子育ては、いずれのグループも、授乳の時以外は母子が離ればなれに暮らしています。授乳は1日1～2回と少なく、しかも極めて短時間(1～2分)で終了します。これも、捕食の危険を回避するためです。このような少回数で長い授乳間隔(スケジュール型授乳)でも、子が育つ

ために必要な大量の熱量を確保できるように、乳汁中に固形成分や脂肪が多く含まれる組成となっています。

さて、二グループのウサギ類の繁殖の違いは、生息分布にも反映しています。繁殖に巣穴が必要なアナウサギ類の本来の分布は、世界的に見て限られています。一方、繁殖場所を選ばないノウサギ類は、熱帯砂漠地帯から北極の寒冷地まで広範囲に生息しています。この違いはわが国においても同様です。アナウサギ類のアマミノクロウサギの分布は南西諸島(奄美大島と徳之島)に限定されますが、ノウサギ類のニホンノウサギは、本州・四国・九州や属島、エゾノウサギは北海道に、それぞれ広く分布しています。

ウサギの仲間は小さなグループ(全部で65種類ほど)ですが、アナウサギ類からノウサギ類が進化して、上述のように繁殖様式が大きく異なる二グループに分かれたと考えられます。

本シリーズはこれで終わりますが、さらに興味をお持ちの方には、様々な哺乳類の繁殖について豊富な写真とともにやさしく解説している『和秀雄編(1999)どうぶつの妊娠・出産・子育て。メディカ出版(大阪)』をお薦めします。



授乳中のニホンノウサギ。母ノウサギは深夜に短時間だけ授乳のために子のところに来ます。



森林総合研究所関西支所発行のパンフレット。当支所ホームページでもご覧いただけます。